



2020年10月 第18巻 第10号

・今月の思想

かく語りき—聖人の言葉

「一度でも真剣に主に祈ったことがある人は、何も恐れることはありません。絶えず主に祈ると、神の恩寵で忘我の愛を得ます。我が子よ、この愛は霊的生活の最も奥深いことなのです」

…シュリー・サーラダー・デーヴィー

「神にととても会いたがっている人に、神もととても会いたがっておられる。

…預言者 ムハンマド

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・お知らせ
- ・2020年12月の予定
- ・2020年9月逗子例会
「霊的生活を身につける」 パート2
講話者：スワーミー・メーダサーナンダ
- ・忘れられない物語

2020年11、12月の予定

<お知らせ>

- ・12、月も引き続きすべてのプログラムは ライブストリーミングを行います。☞[ライブストリーミング](#)
- ・Zoomを使ったオンライン講話は「ラマクリシュナの福音勉強会」と「インド大使館バガヴァッド・ギター聖典講義(於:逗子協会)」です。Zoomにはお申込みが必要です。詳細☞zoom.nvk@gmail.com
- ・すべてのプログラムは 逗子協会でも参加することもできます。その際は3日前までに benkyo.nvk@gmail.com にお知らせ下さい。

- ・11月の生誕日
スワーミー・スボダーナンダ
11月26日(木)
スワーミー・ヴィッギャーナーナンダ
11月29日(日)
- ・12月の生誕日
スワーミー・プレーマーナンダ

12月23日(水)

・11, 12月の協会の行事

<11月のこれからのスケジュール>

11月29日(日) 14:00~16:00 逗子午後例会(日本語)

★メールによるQ&A有

テキスト「瞑想と霊性の生活I」は☞[こちら](#)

講話のまとめは☞[こちら](#)

<12月のスケジュール>

12月05日(土) 14:00~16:00 バガヴァッド・ギーター聖典講義(日本語)

テキスト「バガヴァッド・ギーター」は☞[こちら](#)

講話のまとめは☞[こちら](#)

※インド大使館での講義の続きです。

★Zoom、メールによるQ&A有

12月13日(日) 14:00~16:00 ラーマクリシュナの福音勉強会(日本語)

テキスト「ラーマクリシュナの福音」は☞[こちら](#)

講話のまとめは☞[こちら](#)

★Zoom、メールによるQ&A有

12月20日(日) 11:00~16:30

月例講話(日本語と英語)

※参加ご希望の方は、来協時間と昼食ご希望の有無を3日前までに必ずご連絡ください。benkyo.nvk@gmail.com

講話テーマ:「霊的生活での学びを身に

着ける必要性 Part4」

講演者: スワミー・メーダサーナンダジ

11:00 供物奉獻と瞑想 ※午前のライブストリーミングはありません

12:00 昼食

14:00~16:30 講話

16:30 茶菓

12月24日(木) 19:00~21:00

クリスマス礼拝

場所: 逗子協会本館

17:15 通常夕拝(Arati)

19:00 クリスマス礼拝(プージャ)

19:40 聖典朗読、讃美歌、講話、瞑想

20:30 夕食(プラサード)

※18:55位よりライブストリーミングをいたします

12月27日(日) 14:00~16:00 逗子午後例会(日本語)

テキスト「瞑想と霊性の生活I」は☞[こちら](#)

講話のまとめは☞[こちら](#)

メールによるQ&A有

<講話の際のQ&Aについて>

第3週の月例講話を除く、すべての講話のライブストリーミングでは、皆様からの質問メールを受け付けております。質問がある方は15:25位までに質問のメールを送ってください。

・送り先: benkyo.nvk@gmail.com

・ご質問の内容は、日本語で、わかり

やすい言葉で、短くシンプルにお願いします。

・プライバシーポリシーにより、お名前は公表いたしません。

・講話が始まる前に、質問メールがすぐ送信できるようにご準備ください。

＜ホームレス・ナラ・ナーラーヤナへの奉仕活動＞

12月はお休みです。

お問い合わせ：佐藤

urara5599@gmail.com

＜ハタヨガ・クラス＞

日程：通常 毎月

第1、第2、第4土曜日

時間：10：30～12：00

レッスンが変更になる可能性もございますので直接担当講師にご連絡下さい。

お問い合わせ：080-6702-2308（荒井弘人）

メール：ochanomizuyoga@gmail.com

*専用ホームページはこちら

☞ [ヨガ教室ホームページ](#)

月例講話

2020年9月

「霊性の学びを身につける」パート2 スワミー・メーダサーナンダ

スワミー・メーダサーナンダによる「霊的生活を身につける」の連続講話が7月より始まりました。その第一回目の講話内容は8月のニュースレタ

ーに掲載されています。ここに掲載する9月の講話は、「霊的生活を身につける」の第二回目です。8月はシュリー・クリシュナの生誕祭でしたので、スワミー・ディッヴィヤーナターナンダが「シュリー・クリシュナの生涯と逸話」についての講話をし、その内容は9月のニュースレターに掲載されています]



第一回目の講話では、霊性の真理について何度聞いても、ほとんど誰も自分を変革できるほどには霊性の真理を吸収していない、ということを見ました。ダーラーナー（assimilation:身につける）、つまり聞いたり学んだりしたことを自分の一部とすることについて話を深めました。私たちは、「私はからだではない、私は心ではない。私はアトマン、純粋な意識である」ということをこれまで何度も聞いてきたにもかかわらず、地震などの悲惨な緊急事態に直面した時、死やけがなどの恐怖に圧倒されます。そして「真我」の本性に関するこれらの教えをまだ身につけていない、とい

うことがはっきりするのです。

スワミー・シヴァーナンダら、聖典の教えを身につけた方々の生き方も例として挙げました。さらに『ラーマクリシュナの福音』(福音)から、霊的生活を身につけることに関する教えや発言を引用しました。自分が説教する聖典の教えを身につけていない聖典学者など要らない。そのような聖典学者たちが高尚なことを語ったところで、心は色欲や金や名声のことばかり考えているのだから、とシュリー・ラーマクリシュナは言いました。さらにシュリー・ラーマクリシュナは「ハゲタカは空高く舞い上がるが、その目は墓穴の獣や人の死体のことばかり考えている」という分かりやすい例を挙げました。[一]

『福音』では、霊性を身につけるといふ考えについて頻繁に言及している、ということをもう一度思い出してください。『福音』の中でシュリー・ラーマクリシュナは、霊的な教えを身につけるようにと何度も何度も私たちに語りかけています。霊性を学んでもその学びを身につけられないのは、まるで食べ物を食べてもそれを消化できないのと同じで、結果は栄養失調です。私たちはバガヴァッド・ギーター、ウパニシャッド、チャーンディなど有名な聖典を引用できますが、それと聖典の本質を自分に浸透させることとは、実際

には全く違います。タブラ(小さな太鼓)は、「ターラ」と呼ばれる6~16拍の間のリズムパターンで演奏されます。

「ターラ」のリズムパターンを言葉で説明するのは簡単ですが、実際にこのパターンの拍子をとって演奏することは難しいです。ここでも勤勉で誠実で長期的な実践が求められます。学者は自らが研究した多くの聖典から引用しますが、彼らの多くは霊性の実践者ではありません。私たちは単なる説教者ではなく、実践者になるべきです。霊性の求道者が聖典の勉強から本当の利益を得るには、聖典の教えを理解したうえでその教えを身につけなければなりません。



少しばかり努力する

霊性の良き師シュリー・ラーマクリシュナは、最初はどうなにか少しでもいいので実践しなさい、と常に主張しました。シュリー・ラーマクリシュナは度々、次のように信者を励ましました、「しかし、最初は少しばかり骨を折らなければならない。茂みのとげを踏ん

で足に刺さったときに『いばらの茂みを焼いてしまおう』と言うだけでは何なりません！ 燃やすには火をつけなければ」[二] 私たちは何か行動を起こさなければならぬのです。お腹がすいたときに、「私は食べている、食べている」と繰り返したからといって、お腹はいっぱいになりますか？ いいえ、なりません。食べるという過程全体を考えてください、例えば、財布を持つ、店に行く、食べ物を買う、家に持って来る、料理をする、そしてもちろん、食べる、消化する、ということをしなければなりません。そうして初めて、食べ物から栄養と強さを得るのですから。

このようにシュリー・ラーマクリシュナはちょっとだけ努力するように求めましたが、最初から熱心に実践をせよ、とは言いませんでした。シュリー・ラーマクリシュナは、節度ある働きかけは聞き手が実践を始める勇気づけとなる、ということを知っていたのです。けれども、実践者自らがすぐに気づくのは、少しくらいの実践では不十分なので、もっともっと実践しなければならないということです。眠るのが大好きな人が眠っているとします。その人を起こして走らせることはできません。なぜなら、その人が起きて走るわけがないからです。そのような人に対しては、まず座りましょうと励まさなければなりません。それから、立つ、歩く、

というように段階を踏むのです。最後に必要であれば、目標を達成するために走るように励まします。重病患者に対して、あなたの病気はとても重いのですぐに死ぬかもしれません、と宣告するような医者には、患者をたいそう刺激し、死を早めるほどの絶望の淵に追いやりませぬ。そのような心理状態は、心に深いショックを与えるからです。良い医者には、患者の容態に関して正直でありながらも、患者を励まします。患者に対して、病気の改善と治癒のために治療を受けましょう、と勇気づけるのです。そうすると患者は勇気づけられ、精神的に強くなります。このことは治療の効果をあげるために極めて重要なことです。

どちらもマーヤーの領域

シュリー・ラーマクリシュナは、神の中にはヴィッディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーの両方があるともし [三]、次のような例をあげました。ある男が部屋の中にいるのだが、その部屋の窓もドアもすべて閉ざされているので、部屋の中には暗闇しかない。この場合の暗闇とは、霊的な見方で、無知なるマーヤー（アヴィディヤー・マーヤー）のことです。しかしもし、部屋の中に太陽の光を入れれば、無知の状態は、知識つまりヴィッディヤー・マーヤーへと変革するでしょう。シュリー・ラーマクリシュナは、

アヴィディヤー・マーヤーはラジャスとタマスからなっており、ヴィッディヤー・マーヤーはサットワからなっていると仰いました。ラジャスとタマスは人を霊的無知へと導き、サットワは霊的知識へと導きます。どちらもマーヤーの領域ですが、まったく違った結果をもたらします。例えば、欲望、執着、束縛、怒り、うぬぼれ、嫉妬、暴力、不調和、嘘、無知は、ラジャスとタマスの特質の結果です。一方、調和、純粋さ、真実、慈悲、智慧はサットワの特質の結果です。

本当は光に導かれたくない

シュリー・ラーマクリシュナは、「人はサーダナの段階で、しばらくは骨を折らなければならない（霊的苦行）」と仰いました。[四] 「しばらくは骨を折らなければならない」とは、先ほどの真っ暗な部屋の話でいうと、私たちは起き上がって窓を開けるか外に出る努力をしなければならない、という意味です。しかし霊的苦行は、起き上がる、窓を開ける、といった単純な身体的な努力以上のことです。この講話の最初に朗読したオーム アサトーマー サドガマヤ「暗闇から光へお導きください」の暗闇と光とは、実際の暗闇と光ではなく、霊的な暗闇と光のことです。

実のところ、私たちは光に導かれた

くありません。このことが私たちの実際的な問題です。私たちは眠っているのが好きなので起こされたくないのです。このことに密接に関連する次のような二つの引用句があります：

「誰かを街燈柱に連れていくことはできても、その人に光を見せることはできない」

「馬を水場に連れて行けても、水を飲ませることはできない」

すなわち、自分自身で目を見開いて光を見ようとしたり、水を飲もうとしない限り、光や水のそばにいても意味がありません。次にシュリー・ラーマクリシュナが言った、部屋を出る、窓を開ける、とはどういう意味でしょうか？ 部屋を出る、窓を開けるとは、欲望や執着を取り除くこと、より純粋になるために学ぶこと、そして、神への愛を増やすことです。『福音』の中にもう一つ例があります。太陽は空にあるが雲が広がると見えない。しかし風が吹いて雲が吹き去ると、太陽を見ることができるようになる。[五] 神のヴィジョンや真理を見えなくしている雲は、アヴィディヤー・マーヤー、つまりラジャスとタマス、執着と欲望などです。だから、それらを根気強い実践で取り除けば、知識という太陽を見ることができるようになります。これが「人は少しばかり骨を折らなければならない」という言葉の意味です。

ひそかに実践をする

聖典の教えを身につける方法のひとつに、主の御名を唱え続け、神のことを絶えず覚えておく、という方法があります。シュリー・ラーマクリシュナはそのことに関して、そのような実践は、ひとり孤独に、気の散るものを避け、人目を忍んですべきである、と指示しました。[六] 主イエスも「断食していることが人に知られないようにするために、頭に油を塗りなさい」[七]と、同じようなアドバイスをしました。自分の霊的实践を見せることは、ラジャス的な信者のしるしですが、ひそかに実践するのはサットワ的な信者のしるしです。[八] ラジャス的な性格の信者の中には、霊的にどれほど進歩しているかを見せるために、人々の注意をひこうとルドラクシャの数珠や宗教的な象徴となるものを好んで着ける人もいます。そのような信者が寄付をするときには、新聞にその記事が載るように記者を読んでカメラの前でポーズを取るのです。しかし、サットワ的な人は他人から見えないうに瞑想をします。シュリー・ラーマクリシュナは、サットワ的な信者は霊的实践のために一晩中目覚めていて、朝は遅い時間まで寝ていることもある、と言いました。人々はその人を見て、夜に眠れなかった可哀そうな人が寝坊していると想像するかもしれませんが、本当はその正反対です。シュリー・ラーマクリシュ

ナの弟子の中では、スワミー・アドブターナンダがたびたび一晩中瞑想をして、昼寝をしていました。彼はまさしくバガヴァッド・ギーター第2章69節の生きた手本でした。その節では、ヨーギーと一般の人々との非常に大きな違いが語られています。

yā niśhā sarva-bhūtānām tasyām
jāgati sanyamī

yasyām jāgrati bhūtāni sā niśhā
paśhyato muneh

あらゆる生物にとっての夜に、物欲を捨てた賢者は目覚めており、またあらゆる生物が目覚めている昼は、逆に賢者によって夜とみなされている。

女と金

シュリー・ラーマクリシュナは男性信者に対して「女と金」に執着しないように警告しましたが、女性信者に対しては「男と金」に執着しないようにと言い換えました。『福音』ではひんぱんに「女と金」という言葉が使われていることから、『福音』を深く読んでいない読者の中には、シュリー・ラーマクリシュナは女性への配慮が足りず、女性のことを本質的に嫌っていると言う人もいます。しかし、このことは事実を基にしたものとは言えません。なぜなら、シュリー・ラーマクリシュナ

はすべての女性を聖なる母のあらわれであるとして、尊敬していたからです。彼は、ご自身の妻シュリー・サーラダー・デーヴィーをも母なる神として礼拝しました。シュリー・ラーマクリシュナのタントラのグルは女性のバイラヴィ・ブラフマニーでしたし、彼の理想神はマザー・カーリー女神でした。しかし彼は何度も信者たちに、霊性の実践の浅い段階では異性との交際は避けるよう特に注意せよ、と言いました。なぜなら、異性に惹かれてその異性に執着し、霊性の道から両者が墮落するのは、よくあることだからです。しかし、一旦、神を悟れば、その人は性別に関係なくすべての人を本当の神のあらわれだと見ます。シュリー・ラーマクリシュナは霊的生活の最終地点を、屋上にたどり着くことに例えました。もし屋上にたどり着きたいなら、はしごを注意深く一段ずつ慎重にのぼらなければなりません。途中で踊るなんてもってのほかです。しかし、一旦屋上にたどり着いてしまえば、ダンスを踊りたければ踊ってもいい。もう危険な目に合うことも、脅威となるものもないのだから。

ホーリー・カンパニー 聖なる仲間

シュリー・ラーマクリシュナは、サドゥや真摯に霊的实践をしている人との聖なる交際も勧めました。[九] なぜなら、そのような交際は霊的な真理

を身につける助けとなるからです。信者が聖なる人々の模範的な霊的生活を観察すると、自らも実践しようというやる気も出ます。その信者たちは、聖者たちの人生の霊的生活の具体例を学ぶのです。一方で学者は、聖典の章や詩節を感動的なコメントを添えて引用できても、実践の根拠を欠いています。実践していない学者は、あるアーユルヴェーダの先生のようなようです。その先生は診療室にジャゲリー（サトウキビの濃厚蜜）を常備し、それを定期的に少しずつ食べています。その先生が糖尿病患者に甘いものを食べてはいけないと言ったとしても糖尿病患者は、先生だって部屋に自分用のジャゲリーを置いているのだから甘いものが健康に悪いはずがない、と考えるでしょう。だからその患者は先生の指導には従わず、結果としてからだを害してしまうのです。同じことが霊性の師にも言えます。放棄の実践をしていない師が放棄についての助言を与えたところで、聞き手はその教えをさほど重視しないだろうし、その教えにまったく感化されないでしょう。

霊的生活を身につける際の障害

霊性の真理を身につけるには、様々な障害があります。パタンジャリのヨーガ・スートラによると、以下の9つの障害があります。[十]

①ヴァーディ（身体的な病気）、②スティヤーナ（無気力）、③サンシャヤ（疑い）、④プラマーダ（不注意）、⑤アーラシヤ（活力低下）、⑥アヴィラティ（自制なき感覚の楽しみ）、⑦ブラーンティダルシャナ（間違った認識）、⑧アーラブブダーブミカトヴァ（どんな形のヨーガの状態も達成できないこと）、⑨アナヴァスティットヴァ（霊的生活で遂げた明確な進歩を継続できないこと）

これらの障害について理解することで、私たちはその障害を軽減できます。

（1）一つ目はヴァーディ（病気）です。身体を患っているとき、私たちは実践することは難しいです。それが急性の病気でも慢性の病気であっても。これについてあるコメンテーターは、消化を整えることで多くの病気を治すことができるし、病気の予防にもなる、と述べています。[十一] 体に良い食べ物を、それぞれに見合った調理をし、ふさわしい量を食べることで十分な栄養を摂ることはできます。なぜなら人によって消化の具合が異なるからです。それから、食べるときは、前に食べたものを消化してからにしてください。ほとんどの病気の源は、頭とお腹です。ですので、頭とお腹という極めて重大なからだの器官には、特に注意を払ってください。そのことは健康を保つために最も重要なことです。

（2）二つ目はスティヤーナ（無気力、怠惰）です。多くの方は心が怠け者です。たとえ身体は怠け者でなくても心が怠け者なのです。どれだけ多くの有益で鼓舞されるような助言を聞いたとしても、私たちの心は快適な生活様式や生き方を変えたくありません。なぜなら、その生活様式などは長い時間をかけて慣れ親しんできたものだからです。スティヤーナはもっとも危険で精妙な障害だと特に認識しておくべきです。

「クリシュナ（神）が慈悲深く、グルが慈悲深く、神の信者が慈悲深くあったとしても、自らが慈悲深くなければ、霊的生活は破滅します！」というベンガル語の意味深いことわざがあります。自らの慈悲深さとは、自分自身の心が慈悲深い、ということです。つまり、私たちは人生を変革できるように自分の心に働きかけるべきで、そのために意志の力（will-power）を使い、必要な霊的な実践を始めなければなりません。それをせずに、ただ霊的な理想について読んだり聞いたりするだけでは、ほとんど意味がありません。だから、スワミー・ヴィッギャーナナダは、心に対して次のように祈るように言いました。

「おお、心よ、私に慈悲深くあってください。

必要な実践ができ、霊的な進歩があ

るように、どうか私に協力してください」

(3) 三つ目の障害は、サンシャヤ（疑い）です。疑いには多くの観点があります。例えば、神は存在するのだろうか？ 自分が学んでいることが正しいのだろうか？ もしも教わった通りに実践をしたら、どんな結果を得られるのだろうか？ 聖典は真実を明らかにしているのだろうか？ などの疑いがあるかもしれません。そして分からないときに、霊性の師に疑いの説明を求めても構いません。しかし中には、ただ懐疑的な性格の人もいます。その人たちは疑いのためだけに、質問や疑問を投げかけます。

(4) プラマーダは無気力を意味します。気力が不足していたり、熱意がないと、私たちは前に進むことができません。

(5) アーラシヤとは身体的な怠惰のことです。アーラシヤはタマスの状態のことですが、その状態の時、人は長時間寝ることを好み、何かを成し遂げるのに足るほどの努力をしません。アーラシヤとスティヤーナの両方に当てはまる人は、霊性の求道者としての望みはほとんど叶いません。

(6) アヴィラティは、感覚的な楽しみを好きになり、それを抑制せず、ず

っと続けることです。例えば、目は観光名所やおもしろい映画が大好きです。耳はいつも音楽を聞きたい。味覚について、おいしい食べ物にとっても愛情を示す人は味わうことを中心に生活しています。嗅覚では、香水やコロンのような香料を過剰に使うのを好む人もいます。(皮膚の感覚では) 快適さを求めて非常に柔らかいベッドを求める人もいます。それから、(会話のレベルで) おしゃべりやうわさ話が大好きな人もいます。(手について) 本当にすべき仕事は何もないのに、常に忙しくせずにはいられない人がいます。また、ずっとあちらこちらをうろうろして、静かに座ることができない人もいます。霊的生活を始めた以上、感覚に対するそれらの執着を断ち切り、慎むこと。それができなければ霊性の生活は進まず、霊性の教えを身につけることもできないでしょう。

(7) ブラーンティダルシャナは、間違った認識という意味です。この障害は、一時的なものを永遠だと思ったり、有限のものを無限と思ったり、相対的なものを絶対的だと思ったり、執着を愛だと思う、などの間違いが原因です。また、親密な友情を永遠だと思ったり、自分の生活周辺の人や物はずっと続くと思う、という間違った認識もあります。また、間違った霊的实践をとっても魅力あるものだと思ってしまう。その実践をするための必要な準備

ができていないので自分にとってふさわしくない、ということを知らないのです。

(8) アーラブダーブミカトヴァとは、どんな（ヨーガの）状態にも達成していないことです。つまり、そのヨーギーはまだいかなるヨーガの状態もしっかりと確立することができていません。

(9) 最後はアナヴァスティットヴァです。実質的に霊的進歩を遂げたヨーギーが再び墮落するのは、自我が出たり、ひとりよがりになったり、霊的生活の落とし穴に落ちないように自分をしっかりと守らないこと、などが原因です。

[ここでパート 2 の講話は終わりで、パート 3 に続きます]

[一] ～ [六]、[八] [九] 日本ヴェーダーンタ協会出版『ラーマクリシュナの福音』初版

[一] 773 頁 [二] 597 頁 [三] 831 頁 [四] 597 頁 [五] 710 頁 [六] 603 頁 [八] 287 頁 [九] 782 頁

[七] マタイによる福音書 6 : 17

[十] パタンジャリのヨーガ・スートラ 1-30

[十一] ヴィヤーサ・ヴァーシャ（ヴィヤーサによる解説書）



忘れられない物語

「戦士の質問」

ある高潔な戦士が平安を求めて禅寺を訪れた。穏やかな瞑想の内にある師を見て、戦士は悲しみに打ちのめされた。戦士は人生のすべてをかけて勇敢に義を尽くして戦ってきたと自負していたが、目の前の師のように徳は修められないのではないか、と案じたのだ。

戦士は師に尋ねた。「なぜ私はこんなにも自分は劣っていると感じるのでしょうか?」「私は名誉をもって戦ってきたし、弱い人たちを守ってきました。だから恥ずべきことは何もないのです。それなのに、今、あなたを拝見して、

自分の人生には全く意味がないと感じました」

「少しお待ちください」と師は微笑みながら言った。「他の訪問者たちの話を聞いてから、あなたと話をしますから」

戦士は庭の木の下に腰を下ろした。訪問者たちが寺に入っては出て行った。皆、帰る時には温い表情を浮かべて、優しい師のもとを去った。戦士はそれを見てもっと悲しくなった。

日が暮れて訪問者が途絶えた。悩み深き戦士は、マスターに「そろそろ教えていただけないでしょうか？」と尋ねた。

師がうなずいたので、二人は後ろにある講堂へと歩いて行った。講堂の大きな窓には月が輝き、淡く白い光がすべてを潤していた。「月を見てごらん、なんてきれいなんだろう」と師は言った。「月は天空を横切る。そして太陽にその軌道を引き継ぐ。太陽は月よりもとても明るくて強い。それに雲や山や木を月よりもはるかに照らすことができる。だからといって私は月がこんな風に嘆いているのを聞いたことがない『どうして私は太陽のように輝かないのだろう、私が太陽よりも劣っているからだろうか？』と」

「もちろんですとも」と戦士は言った。「太陽と月は別のものです。それぞれに独自の美しさがあります。両者を比べることなどできません」

「そうさ、お前さん、答えを知っているじゃないか。お前さんと私は別の人間だ。どちらも自分が信じた道で戦っている、世界がより良い場所になるように。それ以外のことは、表面的なことに過ぎないのだよ」

ブッダ・グルーヴより

今月の思想

人生には二つの悲劇しかない。ひとつは欲しいものを得られないことで、もう一つは欲しいものを得ることだ。

…オスカー・ワイルド

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp